

豊潤な古典学習のあり方について

－ 系統性と教材発掘の両面から －

学習開発コース(13220909) 中 條 芳 彦

高校における古典嫌いは文語文法の指導に原因があると考え、改善に向けて模索を続けてきた。しかし、先行研究やアンケート調査から、もっと古典学習の根源的な部分を熟考すべきという思いに至っている。学習者の主体的な学びを保障するために、まずは教師が小・中・高の古典学習の系統性を具体的に把握すること、そして学習者の興味・関心や経験との関連付けを意識した、新たな教材発掘を図ることの2点に着目し、考察する。

[キーワード] 文語文法の学習, 系統性, 古典のつかみ直し, 関連付け, 教材発掘, 意識の改革

1 問題の所在と方法

(1) 研究に至る背景

古典嫌いの高校生は多い、という調査結果がある。国立教育政策研究所の平成17年度の高等学校教育課程実施状況調査において、「古文」と「漢文」の好悪について否定的な回答をした生徒の割合はそれぞれ72.6%, 71.2%と実に高かった。生徒の苦手意識が強いと想像される数学(57.4%)や物理(56.5%), 英語(55.4%)の数値を大幅に上回っている。この原因の1つに、まずは文語文法の学習が挙げられるだろうと推測した。基礎的な学習段階で自信を失う生徒が現任校では多いからである。文語文法指導を見直すには入学前の生徒たちの学習状況を知る必要があると考え、一昨年の8月、約40校の中学校にアンケート協力を依頼した(中條, 2011)。しかし、研究発表の場を得たにもかかわらず、「中学校での学習内容を高校側がもっと知る必要がある」程度のまとめで終わり、文語文法指導の具体的な改善案の提示には至らなかった。その後も自分なりに模索が続けたが、同時に、何か大事なものを見落としているのではないかという思いを払拭できずにいた。

文語文法の学習のあり方も含め、古典学習の根源的な領域に関して熟考し、実践を重ねていく必要があるのではないか。また、古典嫌いの原因を学習者側に求めるという発想を捨て、国語科教師の意識の改革を企図していくべきなのではないか。それらの思いに至ったことが本研究の動機である。

(2) 研究の目的

豊潤と呼べる古典学習のあり方を明らかにしたい。現任校は高校だが、学習の系統性を踏まえ、

小・中学校にも視点を広げていく。

(3) 研究の方法

学習者の古典学習に対する意識調査や中・高の国語科教師への聞き取り、先行研究などを材料に研究を進める。また、教材の開発や研究などもテーマ追究のもう1つの柱とする。

2 先行研究の検討

(1) 古典学習の系統性

教育基本法の改正を踏まえた中央教育審議会の答申をもとに、平成21年3月に高等学校学習指導要領が公示された。新学習指導要領は、小学校では平成23年度入学生から、中学校では平成24年度入学生から、そして高校では今年度から、年次進行により実施されている。注目すべきは、小・中・高の指導事項として「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」がそれぞれに新設されたことである。これにより小1から高3までの古典学習の指導はこれまで以上に系統性を意識していく必要が出てきた。

佐藤(2011)は学習指導要領の改訂に際し、「中学校国語科における古典指導は転換期を迎えた」と述べ、「これまで中学校で初めて本格的に古典にふれることを前提としていた古典教育を、小学校との連携を踏まえ」て指導していかなければならないこと、「小学校で音読や暗唱などで親しんできた古典教材に、新たな視点での指導が求められる」ことなどを問題点として挙げる。

中嶋(2013)は、小・中の教科書に採録される古典教材や、指導書が提示する学習内容を一覧にした。小・中で同一の教材・言語活動が設定されて

いる利点を生かして、ものの見方や考え方の変容、文章表現に関わる成長等を振り返らせてはどうかと提案する。付けるべき能力が違うため、小・中で同一教材を用いることに問題はないとする考えにはうなずけるが、系統性の具体的な洗い出しについてはさらに求めたいところである。

(2) 古典学習のつかみ直し

そもそも「古典を学ぶ意義」とは何か。岩崎(2011)は「古典は人生を豊かにする。人生をいっそう充実させるために、人は古典を学ぶ」と語る。学校の古典学習が、国語科教師のこういったポジティブな価値観に支えられているのはあながち誤りではないだろう。平成20年1月の中教審答申が示す「我が国の言語文化を享受し継承・発展させるため、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成する指導を重視する」という基本方針を受け止める理解力と素直さが、現場の教師にはある。

一方で、古典学習のつかみ直しに向けた論説も以前から見受けられる。益田(1967)は高校生にとって古典学習が「自己の人間形成に不可欠のものとして、必要が痛感されて」いないと述べ、その理由を、古典の価値が万古不易なものとして捉えられているためだと指摘した。また、竹村(2011)は古典学習について「鑑賞主義的で活動本位の、知的刺激の欠如した扱い方が学習者と「古典」との間に横たわる距離を拡大してきた」と持論を展開する。学習指導要領を超えた議論を求め、「伝統的な言語文化」のつかみ直しが必要であると訴える。例えば「伝統」に関して言えば、「現在の根拠を過去に求める人々にとっては「不変」だが、継承する人々にとっては常に更新されるもの」であるとし、「伝統」は「変化、更新の持続的な展開こそが本義となる」と主張する。つまり、古典学習と現代人との関係をもっと深く掘り下げる姿勢が、国語科教師に求められているのである。

3 実践から

質、量ともに乏しいが、現段階における実践として、今年度の山形県内A中学校(3年生)と山形県内B高校(1年生)での実習を振り返っておく。

(1) A中学校での実践

①感覚の交錯を意図して

小野小町の「思いつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを」という歌は、中学生にも十分理解できる。それは、中学生が経験を

通して持ち得る感覚、すなわち、思いを寄せる(または思いがけない)人が夢に現れるという経験を通して得られる思いが詠まれているからである。

「夢に現れた人物は夢を見た自分に思いを寄せている」という当時の常識と現代人の感覚との違いを知ることで、古典学習への関心を喚起しようとした。ただ鑑賞するのではなく、主体的に、自分の感覚と関連付けて古典を味わわせようとしたのである。授業の導入として扱ったのだが、興味を持って教師の話聞いてくれた。半ば教師からの一方的な説明になってしまったが、学習者と古典との接点に関するヒントを得られた。

②難解そうに見える資料の提示

「おくのほそ道」の冒頭を読むにあたって李白の「春夜宴桃李園序」を資料として用いた。中学校では通常扱わない訓読漢文を中心にレイアウトし、その脇に小さく書き下し文と口語訳を載せたプリントである。学習者の多くは「何これ」「難しそう」という声を上げていたが、数分後にはグループ内で資料と「おくのほそ道」の冒頭との関係について話し合っていた。訓読漢文の読みにまともにも挑戦したわけではない(つまり口語訳の部分に頼った)だろうが、少し難しいことにチャレンジしているという感覚が学習者にはあったのではないか。中・高の古典学習の接続について、そのあり方の1つを考えることができた。

(2) B高校での実践

①アンケート調査の実施

1年生の全クラスで「古典学習及び文法学習(口・文語)についてのアンケート」を実施した(11月。有効回答数267)。学習者の古典学習に対する意識や自己評価を質問事項に配している(23問)。

意外だがこれによると、高校生の多くが古典を嫌っている、とは言い切れないようだ(図1, 2)。Q23の回答(図3)も併せて分析するとさまざまな仮説が立てられそうである。同様の結果は山形県内C高校(1年生)でも見られた。また、古典を学ぶ意義はあるかと尋ねてみたところ(Q3)、「大いにある」と「少しあると思う」を合わせると184名、実に7割近くが「ある」と考えている。ただ、自分なりにその意義を説明できるか(Q4)という質問には、そのうちの67.9%が「答えられない」と回答していた。学ぶ意義をつかめないまま古典のテキストに向かっている生徒が少なくない、というのが実態のようである。

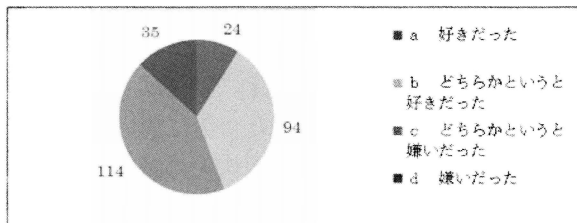


図1. 中学時代、古典学習は好きでしたか(Q1)

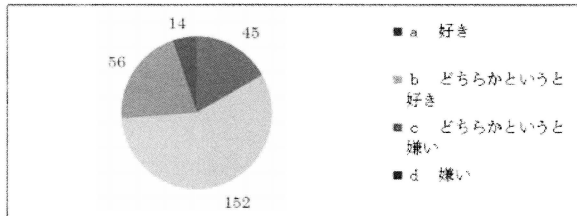


図2. 現在、古典学習は好きですか(Q2)

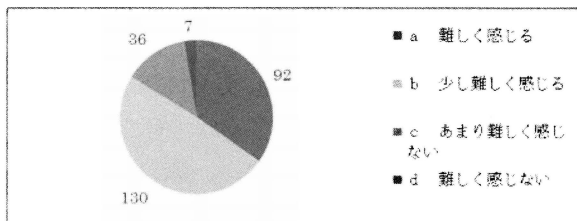


図3. 現在、高校での文語の文法学習は難しく感じますか(Q23)

②古典を学ぶ意義を考える授業

アンケート結果を踏まえ、授業実習では古典学習の意義にダイレクトに迫ってみようと考えた。

漢文の故事成語を扱い、「助長」では「畑に走ったのが子どもだったのはなぜか」、「推敲」では「韓愈が敲の字がよいと判断したのはなぜか」という質問に絞って、グループごと考えをまとめるという授業を行った。多様な解釈を表出させ、読み手の関心や知識、状況などによって古典の解釈は変化することを確認し、現代人の主体的な読みによって古典は価値づけられる、とまとめようとしたが、内容のない活動本位の授業に堕したことは否めない。書き下し文の確認や音読の反復練習なども重点化したため、焦点が分散した感もある。

4 考察

文語文法学習は古典を学ぶ上で不可欠だが、それはテキスト理解を支える知識の1つとして捉えたい。肝心なのは、古典に対する現代人の主体的な姿勢である。この考えを前提に論じていく。

(1) 系統性の中身

古典学習の系統性を文法学習にバイアスをかけて考える。系統性を重視する教師や研究者は多い

が、具体的な指摘になかなか至らないからである。

「リズムを感じ取りながら」(文科省, 2008) 文語調の文章を読む小学校での音読の学習は、文語文法学習の入り口と言えよう。興梠(2009)は古典指導を苦手に行っている小学校教師が多いことを踏まえ、中学校と連携した音読活動を模索している。興梠は「追読」や「句点読み」、「現代語訳と原文の交互読み」「暗唱への挑戦」といった音読指導の工夫に加え、中学生が作製した紙芝居などの活用も試みた。また、小・中の国語科教師でTTを行うなど、示唆に富む実践を展開している。

中学校学習指導要領の「伝統的な言語文化に関する事項」が示す第1学年の指導事項は、「文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読して、古典特有のリズムを味わいながら、古典の世界に触れること」である。この「文語のきまり」の指導の実際が、多くの場合「歴史的仮名遣い」の学習で留められているようだ(中條, 2011)。しかしそれでは、音読を充実させている小学校の古典学習と比較した場合、明確な差別化は図れないのではない。

そこで提案したいのは、文節の正しい理解のために、文語の用言の活用についての学習を中学校で行うことである。文語の文節を正しく捉えるにはさまざまな文法知識や豊富な語彙力、古典常識などが求められるだろう。これらを網羅的に中学生に学習させよと言うのではない。動詞・形容詞・形容動詞の活用パターン「資料」を用いながら授業を展開できないか、ということである。音読の能力を高めるだろうし、中学校での口語文法学習の充実を生かすことにも繋がる。単純な前倒しではない。具体的な学習方法は今後検討していくが、高校で行われてきたような従来の暗記学習からは離れたものを考えていかねばなるまい。

高校においては小・中での学習をベースにより発展的な内容の習熟を目指す、いわゆる訓詁注釈に偏らないよう配慮する必要がある。品詞分解を経て論理的に口語訳を作り出すことに成功すると、高校の国語科教師は十分に教えた気になってしまう。文法学習の評価が比較的簡単であることも落とし穴だ。文法学習自体を目的化しないよう、指導内容を常に検証し続けなくてはならない。

(2) 関連付けを目指した教材発掘

益田(1967)は「われわれの方がわれわれ以前に強く求めていくから、古典が発見されるのである」

と述べ、国語科教師に「新しい古典発掘の尖兵」であることを求めた。まだ世に紹介されていない価値ある古典を発掘せよという趣旨だが、筆者はこの発掘に関連付けと併せて考えたい。

①民謡との関連付け

庶民の生活感情が謡われている各種民謡を教材にしたい。例えば「長持唄」に漂う結婚の喜びと哀感、古体詩「桃夭」の理解を深めるだろう。さらに「故郷恋しと思うな娘/故郷当座の飯の宿」という句は無常観を考える上で格好の材料になるし、「二度と来るなよ孫連れで」の解釈を学習者同士で話し合うことで、格助詞「で」と接続助詞「で」の違いを能動的につかむこともできる。

②郷土にゆかりのある文学との関連付け

本県出身者の文学作品と教科書の古典を結び付けることで、学習者を刺激したい。一例として鶴岡出身の斎藤秀一を挙げる。言語学者であった彼は魯迅と親交があったという。中国文学に関心をもち、李白の「子夜呉歌」や杜甫の「兵車行」なども読んでいたようだ。それらの漢詩と、反戦傾向の言動で特高に睨まれ、何度か獄中生活を余儀なくされた彼の反戦詩とを読み比べてみたい。

③五感に訴える授業

文字を持たない古代人が旅人を介して遠く離れた恋人に石を届けた、という話が向田邦子の随筆にある。石を触った感触で相手の感情を察したという風説だが、言語と触覚を結び付けて想像力を涵養する面白い授業になると考えている。学習者に石を持参させたい。また、宮廷で焚かれた香や、雅楽の響きなども教材化できるのではないかな。

古典の価値は現代人の読み手が決定するもので、発掘者が押し付けるものではない。単なる地中からの掘り出しではなく、他のテキストや学習者の経験と関連させた発掘を心がけたい。学習者の主体的な学びを保障するためである。

5 到達点と課題（今後の研究の方向性）

(1) 古典学習の系統性について

曖昧さがある系統性については、文法学習の方面に比重を置くことでその具体的な洗い出しが可能になると考える。実践や聞き取り調査、さらに中高一貫校のカリキュラムも参考にして、実効ある系統学習の構築を図りたい。

(2) 国語科教師の意識の改革

斎藤(1960)の言う「芸術教育」を咀嚼してい

たい。目指すべきは訓詁注釈中心の授業ではなく「感動の質を変革し、子どもの心にほんとうの感動を育成する」授業である。授業者としての意識を大きく改革していく必要を感じる。古典学習の意義を支えていくのは現場の国語科教師であって、決して大学入試ではないからである。

引用・参考文献

- 岩崎淳「古典は人生を豊かにする—なぜ古典を学ぶのか—」、『教育科学国語教育』, 明治図書, 2月号, pp. 17-19, 2011
- 興梠大輔「〈伝統的な言語文化に関する事項〉の指導はどうあればよいか—古典に親しむ態度を育成する指導のあり方の研究—」, 平成21年度宮崎県教育研究機関連絡協議会研究発表大会発表資料, 2010
- 国立教育政策研究所「平成17年度高等学校教育課程実施状況調査 質問紙調査集計結果」
http://www.nier.go.jp/kaihatsu/katei_h17_h/ (最終閲覧日2014年1月27日)
- 益田勝実『益田勝実の仕事5 国語教育論集成』, 筑摩書房, pp. 209-212, p. 282, 2006
- 文部科学省『平成20年度改訂 高等学校学習指導要領解説 国語編』, 教育出版, 2010
- 文部科学省『平成20年度改訂 小学校学習指導要領』, 東京書籍, 2008
- 文部科学省『平成20年度改訂 中学校学習指導要領解説 国語編』, 東洋館出版社, 2008
- 中嶋真弓「小学校・中学校の古典学習の系統的指導—古文を中心に—」, 『学び舎—教育課程研究—』, 愛知淑徳大学教育学会, 第8号, pp. 1-10, 2013
- 中條芳彦「入学前までの古典の学習状況調査」, 『平成23年度山形県高等学校国語教育研究協議会研究紀要』, 第45号, pp. 48-58, 2011
- 大滝十二郎『近代山形の民衆と文学』, 未来社, 1988
- 斎藤喜博『授業入門』, 国土社, pp. 137-145, 1960 (新装版2006)
- 佐藤幸代「中学校国語科における新しい古典教育の方向性」, 『奈良教育大学教職大学院研究紀要』, 「学校教育実践研究」, Vol. 3, pp. 29-38, 2011
- 竹村信治「『伝統的な言語文化』の掘み直し 古典研究の立場から (パネルディスカッション)」, 『全国大学国語教育学会発表要旨集』, 2011